

空飛ぶクルマの離着陸場(バーティポート)のあり方 –機能と分類– 中間とりまとめ 概要版(令和7年7月)

1.現状に対する基本認識

➢ 空飛ぶクルマの社会実装・普及が期待される中、離着陸場となるバーティポートのあり方について考えていく必要。ヘリコプターに比べ、騒音レベルの低下により街中での発着も考えられ、次の前提条件をもとにあり方を議論。なお、今後も機体性能やコストの動向に応じて、あり方を見直していく。

○前提条件：『空飛ぶクルマがある程度普及し、料金はタクシーよりも高いが、一般の人も「必要な場合には利用を考えられるレベル」になっており、かつ悪天候時においても安定した運航が行われている状況』

2.空飛ぶクルマ・バーティポートの社会的役割

- 空飛ぶクルマの主なユースケースとして、「空港等からの二次交通」「都市内輸送・都市間輸送」「エンターテインメント」「緊急医療用輸送」などを整理。
 - 空飛ぶクルマがこれらのユースケースで活用されることにより、**7つの社会的役割**が期待される。
- ①社会経済活動の生産性向上

②都市の国際競争力強化

③地方都市間のネットワーク形成

④地域公共交通対策

⑤富裕層の誘致促進

⑥地域医療対策

⑦災害応急対策

3.バーティポート施設のあり方

- バーティポートの分類としては、ポート側の提供サービスの観点から**4つに分類**され、規模等に応じて更に細分化。
- 運航上の拠点となる「**拠点型**」(①整備・駐機基地型／②運航拠点型)
整備機能を持たない「**スポット型**」(③充電スポット型／④発着専用型)
- バーティポートの配置を考える場合、大都市圏と地方部では事情が異なる。設置可能な用地が限られる大都市圏では、小規模なバーティポートの複数配置や、郊外での拠点型バーティポートの確保など、エリア的な視点も考えていく必要がある。
 - 空飛ぶクルマ・バーティポートの普及にあたっての課題を整理。
- 機体価格や運航コストの低減、交通手段として安定的に利用可能になるよう就航率の向上、既存航空との飛行ルールの整理、安全性・騒音等も含めた周辺住民等の理解醸成など**社会受容性の向上**等が必要になる。

	①拠点型		②スポット型		空港型 広い空港用地やエプロン・格納庫等の既存インフラを活用し、大小多様な展開が想定。
	整備・駐機基地型 【ベース】	運航拠点型 【ハブ】	充電スポット型 【充電ストップ】	発着専用型 【ストップ】	
ポートの規模	大規模なもの V ₁	中規模なもの V _H	小規模なもの V _s	—	施設利用型 施設利用者やその周辺向けのポートとして、施設や周辺土地利用に応じて多様なタイプの展開が想定。
一時駐機	あり	あり	あり	短時間乗降のみ	交通結節型 駅周辺など、用地制約と発着需要に対応したポートの展開が想定。
充電	あり	あり	あり	(なし)	単体型 大規模な整備・駐機基地をはじめ、いずれのポートも独立して設置される可能性がある。
夜間駐機格納	あり	あり	夜間駐機のみ(格納庫なし)	(なし)	
整備	大規模なもの	軽度なもの	(なし)	(なし)	

図1. バーティポートの分類

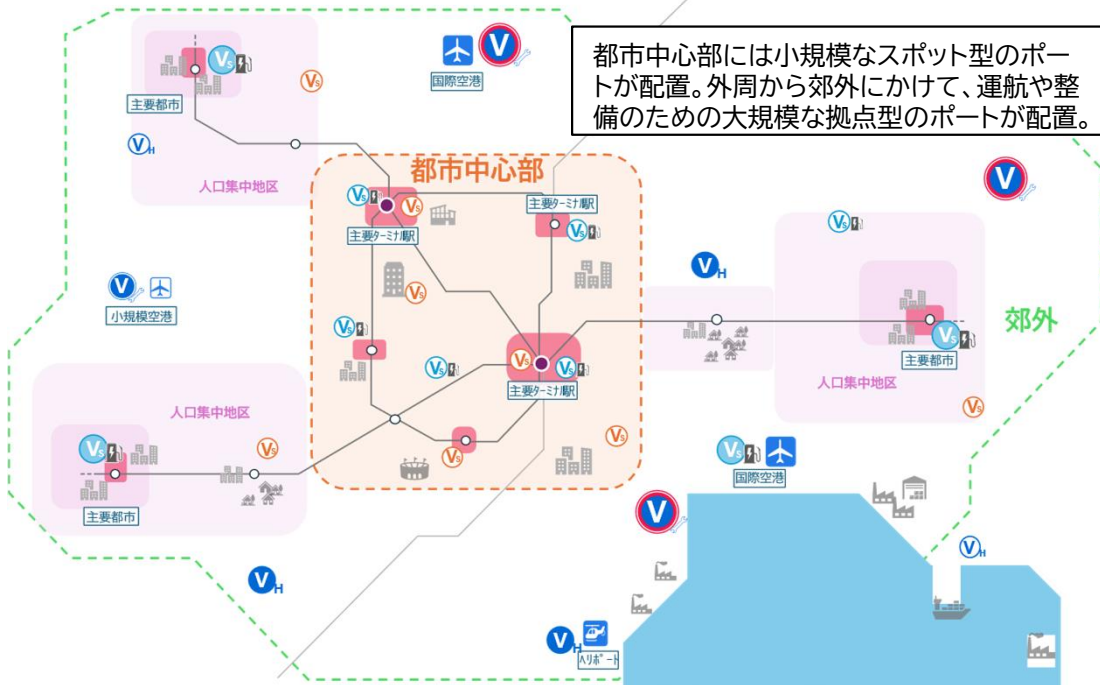


図2. バーティポートの配置イメージ(大都市圏)